

## アトモスフィア

## ダーウィン断章

山本 博\*

金沢はダーウィンが日本で最初に紹介された地である。そういうゆかりもあり、ダーウィンとの二、三の出会いを述べてみたい。

板垣英治金沢大学名誉教授の調べで、明治七年東京医学校でのヒルゲンドルフの動物学講義、明治十年東京大学でのモースの「進化論」講義よりも早い明治五（1872）年に金沢医学館でオランダ人教師スロイスがダーウィンについて講義していることが明らかにされた。金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵の藤本純吉「スロイス生理学」講義録に「英国ノ生理家 darwin 氏ノ説ニ由レハ」との記載を見ることができる。

金沢医学館の跡地には現在、金沢市医師会館が立つ。1995年、金沢市医師会から、来るべき新世紀に遺伝子学はどこまで進むか予言してほしいとのタスクを託された折、ゲノム全解読にはじまるいくつかの事項を示した後、最後に診断・矯正能をあわせもつインテリジェント分子の出現を挙げ、ON THE ORIGIN OF SPECIES（「種の起原」）の巻末部分をもじって“from so large, computerized and automated equipment, smallest, simplest, circulating and permeable forms capable of both sensing and correcting the genic disturbances will be evolved”と結んだ。「宇宙空間で長年月を過ごす人のため遠隔あるいはその場で病気を早期発見・治療するバイオセンサーを開発する」といった研究事業（Science 292, 443）も推進されている昨今であるから、インテリジェント分子の進化速度は存外速いかもしれない。構想が実現されれば、地上の医療も様変わりしよう。

ダーウィンは自著「種の起原」を“Abstract”と言った。その志や畏るべし。ダーウィンからもっとも学ぶべきことは、このような志の高さであり、科学の歴史のエッセンスを吸収しつつ、自ら観察、実験し、新原理を生み出そうとする使命感であろう。「種の起原」第XIV章で“whilst this planet has gone cycling on according to the fixed law of gravity”と記すとき、ダーウィンの裡にはニュートンの発見と自らの発見の関係も明瞭に意識されていたにちがいない。「根元の精神を學ぶ」ことの重要性を説いたベルツは、ダーウィンの名を「歐羅巴人が到る處肌身離さず世界の端迄も携えて行く精神」に刻されている名の一つに挙げた（濱邊正彦訳「ベルツの日記」より）。

ダーウィンは、東北大学医化学教室の「アトモスフィア」を形成する要素の一つだった。「コペルニクス、ガリレオ・ガリレイ、ニュートン、ダーウィンを目指す位の気概をもって研究せよ」というのが恩師岡本宏先生の教えだったからである。この精神は、たとえば、岡本先生自身によって書かれ、ニュートンも登場するアトモスフィア「私たちは何故実験するのか」（生化学79, 1）に彷彿としている。

岡本先生は、ON THE ORIGIN OF SPECIES 初版本（London, John Murray, 1859）を個人で購入、所蔵されていた。白手袋をはめて触らせてもらったことがある。師はそれを、今般の東日本大震災で被害をうけた東北大学に寄贈された。「種の起原」には“Japan”が二度現れる。一度目は海の生物の類似性に関して、二度目は陸生植物の分布に関して。ダーウィン自身そしてダーウィンと共に歩んだ生化学者・医学者の日本、学問、自然、人間への思いが、東北の復興と日本の発展につながり、未来へと継承されて行くよう願ってやまない。

くさまくらダーウィンにしあればみなそこふ進化のことはりしられたるかな

\*金沢大学医薬保健研究域長・大学院医学系研究科血管分子生物学研究分野教授